

り吉、淺い口、辰巳に向、城下より海上八里、陸路  
三望三拾町。牛馬の通ひなし。

(海)

一、蒲江之由、泊之淺より浦代へ遷延、海上北運。此間  
にぎしめきせ候時(芹崎)とて難所有。日和慈熒、  
南風に而候へば、上下之船渡難なし。此淺之長と拾

(以下五頁ページ以下)

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯堂南高芽学校

教諭・岡枝郷土誌クラブ 藤岡

本会会員 市野 瀬

仁

(五) 葛 港 (承前)

(その二) 大正時代

大正時代に入ると鉄道の開通があり、葛附近には埋立  
也会社や公共施設の建設工事があり、活況を呈するよう  
になつた。

「佐伯土地株式会社は資本金百万圓を以て、大正九年四  
月より港前の一畝田塩田二万坪余を購入して、十年五月  
より埋立工事に着手し、地域を劃して井然たる区別を立  
て、又港区にては港正土地株式会社を組織して、数千坪  
の地面を買入れ埋立工事に着手せり。」と云つて、大正十  
年、佐伯製氷株式会社、十二年の魚市場の設立等、港ら

しい様相を呈するようになった。とくに塩田の埋立  
ては、鉄道トネルを掘つた定石や土を利するの  
かき分けで成つたと垣之由董氏(葛区)は述べて下さ  
つた。

「大正十一年には大坂線及び細島線の旅客、本港より搭  
乗するもの一三、三二八人、上陸する者一五、九八六八、計  
二枚、三一八人、また同年度に於ける本港輸出貨物の価格  
(額)は二、九五三、四九九圓、輸入貨物の価格(額)は  
二、〇九四、八九〇圓、計五、〇四八、三八九圓に至り、額又  
同年度中に於ける入港の船舶は汽船と私船を合せて四、三一  
四艘あり」と云つて、汽船で上船、下船する者それそれ  
一日に四〇人程度、合せて八十人程度が利用しているよ  
うである。入港の船舶は明治十五年の開港の蒸汽船、和  
船を合せて二七七艘に対し、四〇年後の大正十一年は  
四、三一四艘となつて、その増大を示している。大正  
三年に勃発した第一次世界大戦、大正七年のシベリア出  
兵等、世界も日本の戦争を契機に、政治や経済や産業界  
に波が大きく揺れ動いている事情が、葛の港に影響して  
きたものと考えてよいであろう。

葛生えぬきの吉田茂氏によると、港は出征、入隊で賑  
わい、その度に回港店の忙しきはうけしい悲鳴をあげ、  
人々の羨望の的であつた。一方陸上では客を待つ人力車  
にトンボ笠をかぶつた車夫の数は、四〇人から五〇人を  
数えたということがある。

こうして大正時代の揺れ動く頃、大正五年に日豊線幸崎佐  
伯間開通、大正九年に日豊線佐伯神原間開通、大正十一  
年に日豊線神原兩間開通と云つて、この地方の便利は  
大きく改善されたに違いない。なかでも葛港や日本回漕  
店には、陸上輸送機関が一歩支那されたことによつて、船  
賃と与えたはずである。それは大正九年以降の輸入物価

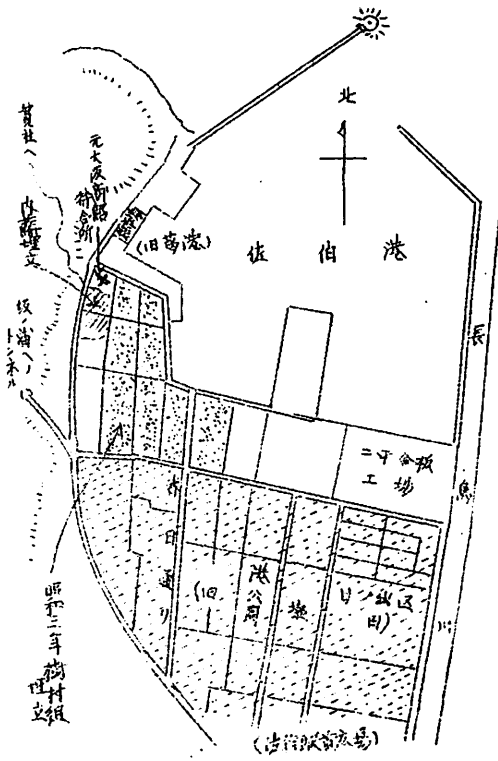
類の減少が顕著となつてゐることでもうかがえる。日本興一氏は一回滞店は交通が頻繁になるに従つて景気が悪くなりまして、重点は稚骨の方に移つていきました」と語られた大正時代は、港區の埋立にとまなう各会社との設立と日豊線開通による港の变化に特徴があるようである。

(その三) 昭和時代

大正時代に引續いて昭和時代も港區の埋立及び防波堤着工が大きな仕事である。佐伯市に於ては昭和八年幹線道路の埋立、九年佐伯海軍航空隊南隊という運びとなり、佐伯市は軍都の色彩が濃くなつて、舊港の標相も、軍の仕事に關係を持つて得なくなつた。とくに今の二平合板の附近には、石炭輸送のため日本回漕店の仕事はその方にまわされた。

(以下大分県、佐伯港改築計画概要書に拠る)  
 「昭和三年漁港築造の名義にて補助と養殖者に受け、埋立浚渫を行ひたり。其工費約十萬圓を要し、土地の埋立は樹材組と契約して由より工費を支出せず。養殖者も補助二萬餘圓も請負者に交付して、埋立てたる土地の収、荷揚場道路の部分を所有と為せり。目下計画の主要は左の如し。

北東及東南方に防波堤を築造し、以て十四ヘクタールの水面積を拓せしめ、港内の大部分を浚渫し物揚場を設け、棧橋を設置し、千噸級の船舶の繫留に資し、防波堤頭には航路標識を設けんとするものにして、各種工作物に就き説明すれば次々如し。



北防波堤は北西の颯風を避け、安全なる鋪地を得るため、延長三百米の十のを築造す。其の構造は混成堤にして、下部捨石、上部混成土方堤積とす。  
 東南防波堤は東風を避け、延長北七十五米の十のを設け、其構造は石張堤又は浪成堤とし、下部捨石上部方堤積にせんとす。

1. 物揚場
  2. 浚渫
  3. 埋立
  4. 棧橋
  5. 燈台を設けて以て航路の標識とす。
- 本工程は總工費三十二萬圓(埋立費を除く)を以て昭和九年度以降同十三年度に至る五年の継続事業として施工するものにして、工費年割額左に如し。

以下表に、佐伯港築造による。

人方史述

年度	工費	国庫補助	県費	町費
昭和九	六〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
一〇	九〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇
一一	六〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
一二	六〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
一三	五〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇	一五,〇〇〇	一五,〇〇〇
計	三三〇,〇〇〇	一四〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇	九〇,〇〇〇

まきの埋立を契約した樹村田治氏以上浦新津井の出身で、豪族落家総廻傭、若い時から大林組に入り、当時以功成つていたので、埋立工事は仕方なく引き受けたようである。御上の左め機軸的精神で奉仕したともうけ取らぬ。補助も少なく、道尾町に、土地は樹村氏に与えぬ結果となり、所謂「樹村町」が誕生した——とは垣之内製杖所の後継者垣之内憲氏が語るところである。

一方堤防工事の村上勇代議士の謙父製杖氏が請負、成つたものと云われ、代議士が帰郷の度に父の仕事を見出し感慨に耽る——と語るのは井上禮次郎氏である。

こうして葛の築堤は佐伯地方市民の案により始まり、市民の有志の手によつて埋立てたり堤防を築いたり、道尾を通して町づくりをして今日に至つたわけである。

### 三、葛の町の問題点

一岸の堤防線もふくめて十数本の桜の木が並び、一岸の桜の近くにあつた石山菓子店は、オロシ唯一のなむら場であつた。

独歩の「源おぢ」が船を漕いで島に人を運んた明治の初めにオロシの島まで来た。明治末年頃の葛の風景である。城下町は北の葛鼻の一角に、島や山に隠れられた

坂の端や海浜方面の海岸に住む人々や、城下町に運んたのが始まりで日ないかと思われる。

大坂商船の蒸気船が碇泊している横に、小さな荷役船が三艘、船腹にくっついて荷物を積みこんでいる古い写真がある。汽船はうすい煙を吐いている。三十米ほどつき出た防波堤の先に、こうもり傘をさした一人が歩いていゝの風情がうかがう。日本回漕船の二階建ての大きな家は、防波堤と中に日さして、大入島の石間と同じ位の距離に汽船が浮かんでいる。安南人がかぶるようなトンボ傘の車夫が、今回漕船から出ようとしている。写真がハッキリしているところから、暑い夏の風景かも知れない。大入島の守後と石間の鼻ととが行儀よく海に敗し、幕末の日本を驚かせた黒船にしてはスマートな巨艦が、時代の变化を感懐しているかの如く見る写真、明治四十年頃のものと云い、これより七十年近くたつた葛の町には、思ひもよらぬ幾多の問題が蓄積している。

今に始まつたことで日ないが、名所長として尊敬され、黒木町長への頃のこと、今の防波堤工事費三百円の七がいで解決通りつくはずが、それが左め南東の風と波をたきこみ、暴風雨の時には大潮が洗つて葛町民を眠らせない、住民の声を聞かない机上のプランであつたという声も聞かれた。

本来オロシで始まつて、旅客船や漁船が浮かぶ葛の町であつたが、近くを通る外航の船が、ドス黒い海面に姿も見せず、海底にも沈まず、浮遊して航行に不安である。よくに夜間の航行に流木とは聞かされただけでも恐ろしい。西田新氏氏年間十万円は事故の左めに要すると語つていた。

夏の台風は、一旦高潮でもきたら山のように巨木のをめに家屋はひたたりもある。と。

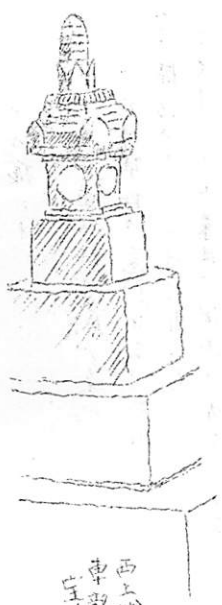
近く、工場に運ぶ大型船や、漁船、客船、各種の船が  
無秩序な運航のため交通規正は急がれている。  
船から上る客待ちの車の列が最近ひどくなり、それが  
左め整理員を高い給料で儲けている始末である。

乗り物の数が多くなり、大型化となり、スピード化さ  
れてきた。葛陵は広いスペースが目しい。又急市場附近  
は埋立の必要にせまられている。県庁上層附近に移転し  
てはどうかという声もある。しかし葛陵はかゝえられた  
自然の防壁を持つ土地から、地元の人々は移転すること  
は承知しまい。将米冷凍業は進んでも、佐伯周辺は漁獲  
高は伸び見捨てたものではないと云う。

以上は葛地城の人々の声である。佐伯港発祥の地葛陵は、  
佐伯港全体の改革の中にもどうあるべきかを問われる時期  
にきた。

大企業と小企業、為政者と地域住民、各職種内の関係  
大企業につきものの公害、そして個人権利の主張。之等  
は全国にわたる所におきている問題である。

私達は住民の意見を聞き、確かな資料を参考にして、  
地域工を捨て、将米も見直し、広い視野に立って、各  
んなの知恵で今の時点でえられる最善の方法を、勇気と  
もって施策する以外になさそうである。将米は又将米の  
人が最善と思われる方法をとつてくれることを信じて  
いるからそう思うのである。



西上浦地又  
東野郎の  
宝篋印塔

記録

再び大野郡の文化財を探る

― 大神権勝の墓などを探る ―  
会員 高木嘉吉

八月十七日、吉藤田さんに案内してもらって、標榜の  
探訪を行った。大野郡と言っても大洞町、千歳村、大野  
町の東部方面で、あまり人には知られず、山陰にそつとあ  
る文化財といつたものが多かった。  
以下概要を記して参考に供したい。

大洞町山内の板碑

高さ一メートル、幅一・二四メートル、重さ二〇〇斤の見事な板碑  
である。  
正面上部に三つの梵字が刻まれている外は何の記録も  
ない、香掛忠次氏の所有地内におり、岡氏が祀つてい  
る。土地の人は石舟楫と称しへ碑石と石舟と見立てて、  
祀られた壺が石舟に乗って当所に飛来したとして尊崇し  
ている由である。  
香掛氏に会つて色々尋ねたが、何を祀つたか不明であ  
る。

大野町長畑の磨崖石佛

磨崖石佛が十体、互つそつと木陰に坐つていゝ。像は  
高さ六、七寸程で大きくはないが、十体横に一列に並んで  
姿は親しき深いものがある。筆者不勉強でこれか河仏で  
あるか明らかにし得なかつたが、土地の人の信仰が厚い  
らしく、仏前に香がなかりあつた。  
吉祥寺の跡とかで、宝篋印塔、大衆妙興塔各一基が、